

集 歌

片詩のみし喪

稔 飼 草

アイリス社刊・東京

過去二年間にわたる
主たる作品を収録す

歌集
喪^{かな}のみし詩の片
草飼稔



メイリン法方・學文

われに

レイモン・ラディゲを示し

若くしてみまかれる

兄・哲郎の霊前に

虔して捧ぐ

自序

* すべてのものを喪つたとき わたしは じぶんの掌だけを
しつかり攪んでゐた。痣のやうに、たつたひと色のきもの
を着けたわたしを。

* それは屍衣であつたか、囚衣であつたか。

* わたしの皮膚は、青空のひと色のやうに伴はないのだが。
いま、わたしは、じぶんの背中を示すにふさはしい断崖の
上に佇つてゐる。たつた一つの色のために わたしをここ
まで急せたのであつた。しかし、間もなく、わたしは自ら

*
あの前額ひたひを蹴ひって、この断崖から身を投げねばならないだらう。それのみが一つ、わたしの肩に遺ひされてゐるのだ。しかもまだ消えぬひと色の雪のやうに——。それにもましてわたしの蹠ひは、ひやゝかだ。
あゝ わたしの追手は、脳髓の中を往つたり來つたりする。

一九三三年三月

草 飼 稔

し
や
ぼ
ん
玉

虹のきものの女の子

きみはみ空のお人魚

散つて消つたしま うろこ雲

しやぼん玉

しやぼん玉の偽のない色は

稚^{ちい}さな音で そのやうに消えた。

びい玉 びい玉

稚い夢のきれぎれを

さまざまな色の 絹糸にむすんだ。

おもひ出は ゆめと うつゝの

格子縞のつゝ袖を着け

わたしを取巻く

千代紙人形のわたしたち

稚いとけない呼名は

互に千代紙切つてゐた

掌の
小鳥

わたしの胸が　あまり狭すぎて

小鳥よ

おまへはすつかり　羽を傷いためた

愛

きみの掌てに 掌わたしをくんで

掌てすぢの鳥籠をつくつてた

ふたりは小鳥

過失

睡つてゐるあひだ たれかが

そつと

スリツパを 盗んだのです。

わたしは一年生 墨だらけの指が
白紙に嘘字を 書いてみました。

*

カタカナのやうに 稚^{ちい}さな指は

純^{ただ}しく編^くまれてゐた

わたしの少年

二
題

繪封筒

あなたの頬を ぬけてきた

涙のほい 薬のほい

*

にほいのない花
散らぬ花

あなたの頬は

造^か花^みの薔薇

掌

掌^て
の
空地

わたしだけ通る
小徑たくさん

掌^ての水溜

魚の目ばかり
流れの雲うつした

*

掌^ての樹木

たくさん
小鳥の咳がひつかゝつてゐる

兄・哲郎

たつた一^{ひと}つの色で生れ

たつた一^{ひと}つの色で死んだ

あなたの死^{デスマスク}面

*

あなたの遺^{わす}れものが

わたしの文字に

結核のやうに隠れてゐる

病
氣

胸
の
中
の
風
車

溜息をつくと錆びた音する

枯れおちた花

わたしの胸のかたちで 床の上にある

*

頁のない本の中に

誰れも読めない文字になってゐる

わたし

咳血よ

おまへはシートに
何處かの國旗をつくる

*

掌^てを合せる

神さまは　もう　お見えになりませぬ

わたしの Leçon

教科書の中に 父と母が互に背をむ合つてゐる。

わたしはその脊を真似、黒板を眺めゐる。

わたしのルソン

暗い言葉のかたちを 今日も
血色の呼吸が流て 哀れに
も私の體操が始まる

みんなおしまひ さういう言葉の背うしろからまた新しいものが
始つて 苦しめる

わたしのルソン 諦かための相たちの中に 誰かがこの真似まねをしてゐる
か よく知つてゐる

私^{ひとり} わたしばかりでない 空しい教科の中に 歩^{あきらめ}を移してゐる
背中の家族

頁を開くと 一齊に霰弾が前額^{ひたひ}を貫く わたしは盲人^{めしひ}となつて
喪しみの點字を索る

罰

目をさますと この世は冬

スリツパに 雪がいつぱい

吹込んでゐる

道

この徑は どこまで歩つても

鶯鳥の聲がゆく先にゐて

常に顔を歪めてゐる

空

雲の背中の 何がわたしを招ぶのか
ふり仰ぐ前額は 動かぬ雲の色をしてゐる

業

父の諦めを
わたしの若さにとち込めて
原稿紙の格子はめ
る

曝冬

この冬

わたしは一本の薪に割られた絶望を焚いて

私ひとりの背中を暖める

詩作法

背中の頁に

文字となつて 遠い祖をの血が

流れてゐるではないか

利根逸男
に

氷の山の頂で 誰れが

この社會よの前額ひたひを蹴つて起こつたか

わたしは知つてゐる

草飼稔

つねに 劔と尾と垂れて

背中の鷺鳥を

きり裂いてゐる人

祕
密

知つてゐる　知つてゐる

わたしの咽喉にも

創られて針をひそめた梢がある、と

體温表

ふるひながら ふるひながら

肉體わたしを引き裂く あ

血色の鋸！

わたしの食事

まだ何も噛みはしないのに骨が
咽喉にさゝつて
私ひとりの食事
を妨げる

おそ秋の 菊に肖にて わたしの血
するどい霜がおりてゐた

私の背中に 業がうに 未知らぬ父に
食器の音たてる

自畫像 1

鏡のために わたしはいつも蹴られた
わたしの顔は蹠だつ
た

自畫像 2

わたしの背中は斷崖。その前に
知らん顔して 佇つてゐる
人。

日
記

夕方 またしても
わたしの呼吸は
血色となつて
神経の
外側を冷く流れる

口の腔から　さまざまな相かたちをした骨片が泄もれる。わたしは何も嚼みはしなかつたのに。

散薬の包装かみに骨片を並べる。処方箋の中の文字のやうに　肉わた
體しがそこに毀れてゐる

胸の中で 水薬の壘がいくつも毀れた
咳をするたび その
音が咽喉にひつかゝつた。

明方の打診が わたしの胸を
日くれにする。

後
術

わたしは卻く 日没のやうに あゝ苦惱をぬけ墜ちるにふさ
はしい背中は瀑布だ。

所業

ペンを持つ手が
鶏になつて
終日
空しい嘆こ聲ゑをあげ
わ
たしの痣を喙む

花と孤獨

白い葩のやうに
掌てのひらをくむ
あなたは
わたしの温室へやで
咲

いたかのやうに

私^{ひとり}を 遺^おき去つて あなたは墮ちた 再^もう樹幹のやうに 掌
を動かせない わたし

何もみえない 聞こえない のに わたしの影にゆれてゐる

樹々の梢

白
い
メ
モ

∧
長
歌
∨

極。咽喉にひつかゝつた聲の行方を誰が知っていよう。

*

空しといふ、言葉の中に 祕密がある。といふことには何の祕密もない。そして、擴げられた白紙のやうに、たゞ、空しさのみが隠れてゐる。おもひ起せばいくつも重なつてくる溜息のやうに。人よ、これはどんなに、容易しく解ける祕密であるか――。

*
*

母はいつ、外出から歸るだらう。五歳のわたしは、空ばかり見える官舎の板塀に、ぼんやりよりかゝつて、黄昏を待ちつくした。

そして今、わたしは二十歳。母は、つねにわたしの學校のかへりを、幼稚園の門のやうに待つてゐる。わたしは今日も教科書を頭上に振つて、無事なる事を合圖する。母の買ひ求めた繪本のやうに。すると、母の微笑が、わたしの血管にも

流れて、繪本の中の母と子のやうに、ふたりを楽しくする。

——みー坊や

あゝ つねに、たつた純潔ひとりのわたしを、守つて下れる母の聲。すべての涙を拭いてくれる、わたしへの呼名。

わたしはふと思つた。母の背中は、十五年前のわたしを隠してゐるのだ。と。

*
*
*

動かない荒海を背負ひながら、わたしは足下に蹲つて、一つの貝殻を掘り當てると、思はず水銀に似たものを、咽喉に込みあげた。

——わたしの死デットマスク面を、まだたれもかたどらないのに、何故埋め遺てられてゐるのか？ と

背中で海が動ゆれだした。わたしの心臓を真似て。

*
*
*
*

さまざまな 未知らぬ色彩が わたしの臉にいくつも重なる。わたしが盲人であるかのやうに。そして、そのかげに匿れて、わたしを監視するたゞ一つの色彩がある。あ、それが何であるか、わたしには判つきりわかる。

* * * *

わたしは掌すぢを齒み切つた。たゞ私ひとりの網囚から遁れ去る

ことのできるように。しかし掌にあふれた血のなかへ、わた

しは身を投げて隠れねばならぬ自らの捕囚とりこでなかつたか。

梢

梢の上に わたしの筆がある

青空の

ひと色に染まりながら

賭博の骨牌カルタが一枚
多かつた。
わたしの背中に
おまへの背
中が忘れて

樹々の梢の上を わたしの爪先が歩いてゐる。しきりに神々の前額を蹴つて。

梢の上で名もない頁を切つてゐる、奈美。わたしはその横顔を讀んでしまった。

二十年 年輪の中に 咽喉をひそめ 空雷をひそめ、わたし
は一本の枯れ木であつた。

日没をうけた廂がどこまでもつゞいて わたしの背中を背負
つた未知らぬ人が前をゆく。

私の繪本

本箱のなかで 私の衣装が骨牌のやうに竝んでゐる
すつか
り私の皮膚の装釘で。

書物の上の毀れた空 へ道 へ
は氷河となつて 肉體の空地へ
流れてくる。

虚しいといふ言葉の流れにこの意識を追ひかけてゆくのか。
始りも終りも乏しい肉體の中の河。

この河を流れながらも 尚ながれ去ずにゐる身に重い知識の
片鱗。

目にみえぬ圖書館の重さであるか。わたしの歩を妨げる肉體
の中の書物。

この乏しい幾つかの知識が私の呼吸に黒い枠をはめて
肉體
の空地に反吐をはく。

私は衣装を脱ぐ その一瞬の私の不在。皮膚のおもてに
冷
い回避がある。

所作

血痰 血痰

あゝす でに

骸骨である背中の家系図

空

何處へつゞくともわからぬ雲の上から、わたしはつねに、
血を咯く小鳥の羽搏きを聞いてゐる。

掌の行衛

旗を振り ぶり
敗北の わたしの 相^{かたち}へ
さつと白い線を
引き去つて 冬

風のまゝ わたしは白い旗となつて 空へ^{そら} すべてを まか
せた

舉げてしまつた 白い^{てのひら}掌 身をまかせた 空へ^{そら} 旗のかたち

は
の^{オメガ}

掌てを振れば
掌てをふれば
あゝ 青空のひみつに
ひつかゝ
る

諦めがまた
わたしを送り
迎へる
その波の行方に
杳とほく
空はて

糧と諦め

ペンを折り 指を焚き 烟となつて
あらぬ肉體わたしを 追ひか

ける 業わざ

諦の糧 骨灰を嚙む齒にこぼれ 原稿紙の中の 文字に隠れ
る

一色の空に 焔となつて起ちあがり 苦脳をもち去つた あ
きらめ

歳
月

皺となり

白髪となつて

この道の羊齒

歩ひとりをからみ

均しく 雨にうたれ 落葉の裏に わたしらの 背中があつ
た

わたしの歩みが たつた私ひとりの名前を消して 足跡にのこした
悔恨

雨にぬれて たつた私ひとりの足下を失くして わたしは肩を
り墜ちた

花を真似 ひとしく 神の足下にわたしらはゐた

指先は 梢となつて 夕空はひくゝ 血にまみれ 雲を刺す

唾^あ 唾^あ 唾^あ きこえぬ聲で 鴉が一羽 ひつかゝつてゐる

わたしの咽喉

後
庭

胸を擴げ
肋骨の朽葉をふるひ落し
すでに十字架である

肉體わたし

絶望が

一本の杭となつて

私^{ひとり}を支えてゐる

わたしの脊髄

動かぬ雲を

前額^{ひたい}に招重^{かさ}ね

つねに

仰ぎみる悔のみ胎す痣

目隠し鬼

さぐり足で
私^{ひとり}の脊柱に佇つてゐる
わたしの目隠し鬼

鏡の曇に隠れ わたしの脊中を
往來ゆききする 父の溜息

脳髓の網目が破れ 幾羽も 背中の雲に迷つてゐる 目の無

い小鳥

詩

1

内臓に のた打ちまわり 言葉となつて

咽喉のどを嚙む

わたしの 舵みち

詩

2

未知らぬ父の 下肢を真似

神の 敗れマントの内をあるく

業しごと

しごと

父の言葉が 背をむいて ギブスになつて

わたしの胸を閉ぢる

あ 五月の空

逃亡の書

われの行方に

ひたすら逃亡の

道ロゴスあるのみ

神々の劔を肩に
天の脊中で
爾の脊柱で
せむしで
業で

天の屍衣 吹雪にからみ 北から北へ 涯から涯へ 神々の

溜息を呼應び

氷の河のまゝ わたしは流木であつた 地を蹴り 天を蹴り

掌をあげて——何も無い
枯木の梢
涯風かぜによるめき
天を

示さす

宿命の花
掌すぢに深く
根をすゑて
わたしを
真似る

天を蹴り 磁針となつて 自らの頭蓋を狙ふ 逃亡の道

敗北の 五體を解いて筏となして 神の背中の非情ながれを降る

掌をあぐれば　　するどく銃となり　　雲の背中に　　敗北を貫く

敗れ神の　　折り棄てし杖など　　そのまま　　わたしの四肢とな
る

神の脱ぎし靴 敗れては わたしの兜 わたしの骨壺

神さづけたる白衣なり 自らの背中を 遁のがれるとてなき背中

を この雪崩れ

道の逃亡^{ロゴス} 神の臥床^{ふしど}に 墓穴に 雷管をひそめる わたしの

骨壺

神の背中を ふみはづし 紘れたる家系圖に 身は五體を裂
いて 落雷する

聖父

天の沙漠に
神々の骨灰サンドルに
背中の迷子を探しては
痴呆を
守る

出
發

枢の蓋を釘^うて

神の跡において

わたしの靴に

鐵鋌^うを鎖^うて

産衣

雲を噛み
父の白髪にふみ迷う
われ
酔ひどれの
神の私かく
生児しご

仰ぎては 空しきもののみうち狙ふ 錆びたる劔 わが身を

支ひ

背負ひたるは ひと色の囚衣の人 生れながらの産衣とや

われはだへの皮膚に

安
酒

安酒の 反吐に溺れる 田舎節 身は肩はづれの板子なり

駒^{こま}はぢけたる三味線なり

愚かしや われの五體を貫くは 神の咽喉のんどにつかゑたる 悪

食の骨

われも脊髄に 悪食の濃汁 充ちたりては 神の道ロゴスに するどく
も 弓 背負ひたる相かたちなり

もくろく

しゃぼん玉

掌の小鳥

愛

過失

二題

掌

兄・哲郎

病氣

わたしの Leçon

罰

道 空 業 曝冬
詩作法
利根逸男
草飼稔
祕密
体温計
私の食卓
自畫像 1
自畫像 2
日記
後衛

所業

花と孤獨

白いメモ

*

**

**

**

**

梢

私の繪本

所作

空

掌の行方

糧と諦め

歲月
後庭
目隠し鬼
詩 1
詩 2
しごと
逃亡の書
聖父
出發
産衣
安酒

跋

東北の生んだ新人、草飼稔の歌集「喪しみの詩片」がいよいよ出る。

由來彼の藝術作品には、東北人共通の暗さと、個性として特色づけるものに多分甘さを有つてゐることは見遁し難いところであるが、それにしても、この華麗な詩句は、詩人として豊かな天分を物語るものであつて、かつて振興歌壇の雄、利根逸男をして「歌壇の新しい行動に於て、彼に比肩し得る言語藝術の馭者があるか！」と讃歎せしめた程である。

實際、彼ほど日本語を豊富に短歌藝術の上に飽和させてゐる作者は稀れである。そこにそなはる自らなる圓熟した歌風

は、やがて、新短歌壇に確固たる地位を占むるに足るものがあろう。

才人を弄するは恐れるに足りない。才人を潜めるとき、はじめて、驚異を以て迎えられるであらう。

草飼稔！ 彼は恐れられる作家であると、自分は彼の作品に對ふとき、いつもさう思ふ。

「喪しみの詩片」よ！

人々に恐れられる。
人々に愛せられる。

昭和八年四月

「短歌創造」編集室にて

花岡謙二

君にお返しする手紙

お手紙ありがとう。

みつちり膨れあがつて来た五月の聲のまはりで、草飼君！
きみは何を感じますか？これ、こんな。まんまるい地球に。

戀をする瞬間、いつも接吻を逆しまに君が受取つてゐるやうに、わたしは、君に、今日こそ惨忍な返事を書かうと思ひます。

草飼君！きみの運動（ひとびとはこれを、詩と呼び、歌と名づけている。）の記録を見てみると、どこか、暗い、吹雪の國が想はれ、さらに、その呼吸いきの瑣細に耳を貸せば、櫂に乗つて涙を拭いてゐる悪の人間の情味が感じられます。

さうして未だ君に逢つたことの無いわたしは、遙かに地圖を
拡げて君の一番近い八戸市の街の人情を懐かしむのです。

草飼君！わたしの良心はいま—— L 4 0 から L 4 1 の
中間で差恥の説明を試み、希望の窓で臆病を強ひられ、現實
のひびきに不思議な「この時」を忘れながら、羽を収めた蟬
のやうにきちんと坐つて、高雅な教養に、いつそう、特殊な
個性に、額を伏せて窓を閉ぢやうとしてゐる君の性格の悲泣
に憧れをもたされます。

草飼君！ここでわたしは再び作品を見直しました。そして
親しい驚きに驚かされたのです。それは、「喪しみの詩片」が、
呑氣の變装として、新しいニヒリズムと、小粋な石川啄木を
そつと住まはせてあることであり、それが酷しい生活の型を

もつて反省され、思想され、態度されてゐることです。



草飼君！わたしはしばらくペンを捨てませう。そして最後に、次の高慢で君の喜びの扉を汚します。

△日本の文學の正しい道が、横光利一でなくて小林多喜二にあつたといふこと。▽

では御達者で——秋になったら君の嵐のひとを連れて遊びにいらつしやい。

昭和八年五月二日

東京・高圓寺にて

利根逸男

第一卷

短歌とニ法
ハハは過度期の試作に於ける作のす
いま更には心算す
昭和五年五月五日
詩片の定價金五円
（送料六錢）

ズイリス法方・學文

有所權數

發行所

東京市大森區
馬込町東九〇一

短歌と方法社

振替口座東京七九九五七番

著者 草 飼 稔

發行者 東京市大森區馬込町東九〇一

井 上 司 朗

東京市芝區麻松町二ノ十五

印刷者 足 立 國 松